

カラダからはじめる溺愛結婚
～婚約破棄されたら
極上スパダリに捕まりました～

結祈みのり

Minori Yuuki



エタニティ文庫

目次

カラダからはじめる溺愛結婚

〜婚約破棄されたら極上スパダリに捕まりました〜

5

書き下ろし番外編

そして夜は更けていく

333

カラダからはじめる溺愛結婚

〜婚約破棄されたら

極上スパダリに捕まりました〜

プロローグ

「誰？」

一条美弦、二十八歳。

彼女は今、生まれて初めての経験に動揺していた。

高級ホテルと見紛うほどの洗練された寝室の中、ひときわ存在感を放つキングサイズのベッドの上で、バスローブ姿で目覚めた自分の隣には、かろうじてシートで下半身が隠れているだけの裸の男が静かな寝息を立てている。しかもその顔立ちには、どこか媒体から飛び出してきたかと思えるほど端正だ。

わずかに乱れた焦茶色の髪。扇形の眉の下の目は、長いまつ毛に縁取られていて、鼻筋はすつと通っている。薄くて形のいい唇といい、完璧な造作だ。

男性が並外れた美形であることは、まぶた瞼を閉じていてもわかった。

「……待って、何これということ」

男を起こさないように静かに体を起こす。だがすぐに、あまりの頭痛に顔をしかめて

片手でこめかみを押さえた。この痛みの原因は——二日酔い。

昨夜、美弦は行きつけの居酒屋で一人酒を呷っていた。とあることが原因で、日付が変わるまでやけ酒をしていたのははっきりと覚えている。

(その後は……どうしたっけ)

そうだ。美弦があまりにハイペースで飲むものだから、マスターが「そろそろ終わりにした方がいい」と心配してくれた。

そんな時、店に入ってきた男性客と話をした気がする。しかし、どんな会話をしたのか、男性がなんと言ったのか、まるで思い出せない。

——じゃあ、この人があの時の……？

自分は初めて会った男と一夜を共にしたというのか。

今現在恋人がいないとはいえ、過去の交際経験が一人だけの自分がこんなイケメンと？

部屋の雰囲気を見る限り、おそらくここはホテルではない。となると、一番可能性が高いのは男性の自宅マンションだろうか。

(……本当にしちゃった、の?)

この状況を考えれば「そう」としか思えない。けれど、もしかしたらそうじゃないかも……と淡い期待を抱いた美弦は、自分の体を見下ろしてハッとする。

——胸元にある小さな痣。

まさか、とバスローブの紐を解いてみれば、それは体中、至るところにあった。胸元はもちろん、太ももの付け根にまでくつきりと刻まれたそれは、昨夜の情事の激しさを表しているようだ。

キスマークというこれ以上ない状況証拠に、一瞬、記憶がフラッシュバックする。

『俺を見て。俺を感じて——俺に夢中になって』

呼吸する間もないほど激しく降り注ぐキス。自分に覆い被さった男が放つ眩暈がするほど強烈な色気——

「っ……………！」

覚えているのは断片的なことばかりだが、彼に触れたことは間違いない。

(何してるのよ、私は)

いくら心が弱っていたとはいえ、一夜限りの関係を持つなんてどうかしている。少なくとも普段の自分ならばありえない行動だ。

「……避妊、したっけ」

そんな重要なことすら覚えていないのがなんとも情けない。

「まずは産婦人科に行つて……その後は、仕事が溜まつてるから会社に行かないと」
ベッドサイドのデジタル時計に視線を向ける。現在、土曜日の午前九時十五分。

一度自宅に戻って身支度を整えて、休日も開いている産婦人科に駆け込んでピルを処方してもらおう。その後は、出勤して溜まつた仕事を片付けなければ。

動揺する気持ち落ち着かせようと、頭の中で今日一日のスケジュールを立てる。そして床に散らばった服を集めようと、ベッドからそっと足を床につけようとした時だった。

「どこに行くつもり？」

「え……きゃあ！」

「まさか、このまま『さよなら』なんてことはしないよな」

背後から艶のある声が聞こえたと思った瞬間、腕を引かれてベッドの上に戻される。

「おはよう。昨日はよく眠れた？」

ほん、とベッドに仰向けになった美弦に覆い被さるのはもちろん裸の男。

「寝たんじゃないの？」

「さつきまではな。でも、起きるなり『産婦人科と仕事に行かなきゃ』って、意外と冷静で驚いた」

「全部聞いてたんじゃない……」

「そうとも言う。君の表情がコロコロ変わるのが可愛くて、声をかけるタイミングを逃した。ごめんな」

にこりと微笑む笑顔の破壊力が凄まじい。

予想通り、瞳を開けた男はとんでもないイケメンだった。

瞳の色は濃い茶色。どこか懐かしい甘い顔立ちの男に見下ろされて、美弦はたまらず視線を逸らす。下着こそ履いているものの、眼前に晒された体軀はあまりに見事目の毒だ。

「あの、この体勢はっ！」

お願いだから離れてほしい。こんな状態ではドキドキしすぎて、とてもじゃないがまともな会話なんてできそうにない。けれど男は自分の下で慌てる美弦に、どこか嬉しそうに唇の端を上げると、そっと美弦の耳元に顔を寄せた。

「恥ずかしいの？——昨日は、もっとすごいことをしたのに」

色気のかげの塊のような囁きに今度こそ顔が真っ赤になる。視覚に加えて聴覚まで刺激されて、寝起きの頭はパンク寸前だ。

「もう、お願いだから離れてっ……っ！」

泣きそうな声で懇願すると、ぼん、と大きな手のひらが美弦の頭を軽く撫で、ゆっくりと体が離れていった。

「ごめん。君が可愛すぎてからかいにくくなった」

こちらを見つめる瞳はとろけるように甘く、美弦はますます何も言えなくなる。男は

美弦の乱れたバスローブをさっと直すと、ベッドから下りて散らばった服を集めて手渡した。

「君も動揺してるようだし、リビングで話そう。そうだ、食べられないものやアレルギーはある？」

「ないけど……」

「オーケー。それじゃあ俺は先に行ってる。シャワーを使いたいならあそこのドアの奥がそうだ。タオルやアメニティもあるから自由にどうぞ。リビングは部屋を出て廊下の突き当たり。急がなくていいからゆっくりおいで」

男はもう一度美弦の頭を優しく撫でると部屋から出て行った。パタン、とドアが閉まるなり、美弦はぼすんとベッドに沈み込む。

——なんだ、あれは。

甘い。甘すぎる。男の美弦への態度はまるで愛する恋人に対するそれのようで、とても一夜限りの相手にするものとは思えない。

混乱したまま、美弦は彼の言葉に甘えてシャワーを借りることにする。

二日酔いもあり、ぬるめのお湯でさっと汗を流すのだいぶさっぱりした。

昨日と同じ服を着て教えられたリビングに向かう。

扉を開けると香ばしい香りが鼻をくすぐる。見れば、男がダイニングテーブルに何か

をセッティングしているところだった。

男は美弦に気づくなり目尻を下げる。

「シャワーの使い方はわかった？」

「え、ええ」

「じゃあまずは朝食にしよう。今ちようどトーストが焼き上がったところなんだ。さあ、どうぞ」

男は美弦の手を引きダイニングチェアへ誘う。あまりにスマートなエスコートに流されるように着席すると、目の前にはとても美味しそうな料理が並んでいた。

焼きたてのトースト、ベーコンにレタスとトマトのサラダ、オニオンスープ。他にも瑞々しいいちごやキウイフルーツまである。

ここはホテルかと錯覚するような朝食に、ごくりと喉が鳴った。

「お腹が空いてるだろうと思って作ってみた。何か苦手なものでもあった？」

「ないけど……これ、私のために？」

ぽかんとする美弦に、対面に座った男は「他に誰がいる」とおかしそうに笑う。

「話は食べてからにしよう。腹が減ってはなんとかって言うしな」

自分たちは食後に戦を考えるのか……？

そんなくだらなことを考えてしまうくらい意外な展開だった。

本当は今すぐ昨夜から今に至るまでの顛末を聞きたい。けれど、せっかく作ってくれなのに食べないなんでもつたいない。

「いただきます」

戸惑いながら食べた朝食は、感動の連続だった。

(なにこのパン、ふわっふわ！)

表面はカリッと焼かれています中はとても柔らかい。ほどよい甘味といい、目が覚めるような美味しさだ。サラダのドレッシングも最高で、思わずどこで売っているのか尋ねたら、なんと手作りだという。

(なんだか、すっごく幸せ)

普段、こうして人に食事を作ってもらうことなんてないため、やけに胸に染みる。フルーツも美味しく、結局美弦は全てをぺろりと平らげた。

「ごちそうさまでした。全部美味しくてびっくりしちゃった」

「あり合わせで作ったものだけど、そう言ってもらえると嬉しいな。——待ってて、今コーヒーを淹れる」

「あっ、お構いなく！」

席を立とうとする美弦を男は笑顔で止めた。

「俺も飲みたいからついでだよ。適当にそのソファに座って待ってて」

「……ありがとう」

言われるままソファに移動して腰を下ろすと、すぐにマグカップを二つ持った男が戻ってきて、ソファ前のローテーブルに一つ置いた。

男は立ったまま壁に背中を預けてカップの縁に口を付ける。そんな些細な仕草さえ絵になつて、自然と視線が釘付けになつた。

そんな自分に気づき、美弦は慌てて視線を手元に戻して、ほのかに湯気の立つコーヒーを飲む。「昨日のことだけ」と男が切り出したのは、一口飲み終えるのと同時だった。「避妊はした。というか、最後まではしていない。だから心配しなくても大丈夫」

それを聞いて「よかつた」と素直に思う。

子供は好きだ。けれど、今の自分は母親になる覚悟も自信も持てない。

「あの……」

「ん？」

躊躇つたのち、美弦は切り出した。

ためら

「正直、昨日のことはほとんど覚えてないの。自分がここにいる理由も、あなたの名前も」素直に告げると男は目を丸くする。

「確かにかなり酔つてはいたけど、さすがに結婚の約束をしたのは覚えてるよな？」

「……今、なんて」

空耳が聞こえた。だが男はもう一度、今度ははっきりと言った。

「だから、結婚」

「けっこん、ケツコン——結婚!？」

「だ、誰が？」

「俺と君が。……まさか、それも？」

あまりの衝撃に返事もできない。目が覚めて見知らぬ裸の男が隣にいることにも驚いたが、今はそれ以上だった。その動揺は言うまでもなく男にも伝わつたのだろう。

男は再度大きく目を見開くと、小さくため息をついて、チェストの引き出しからスマホと何やら一枚の紙を取り出して差し出してきた。それを受け取った美弦は息を呑む。

——記入済みの婚姻届。

「妻になる人」の部分の間違いなく美弦の自筆。その隣の「夫になる人」を見て、美弦は今度こそ絶句したのだった。

1

「寝る間も惜しんで仕事を頑張つて、お給料を稼いで、自分の好きなことにお金を使っ

て何が悪いの!」

三月下旬の金曜日、午前一時過ぎ。居酒屋『善』の店内に大声が響き渡る。美弦が生ビールの入ったジョッキをカウンターに叩きつけると、その弾みで溢れた泡が手の甲を濡らす。すかさずマスターがおしぼりを手元に置いてくれるけれど、既に目が据わるほど酔っている美弦は気づかない。

(私の何が悪かったのよ)

美弦は現在、御影ホテル株式会社本社社のフランチャイズ事業部で営業をしている。

日頃から日付が変わるまで残業することもざらにあるなかなかの多忙ぶりだが、美弦自身は概ねこの生活に満足していた。仕事で結果を出せば、その分給与に反映される。おかげで年収は同世代の平均と比較して抜群に高い。

そんな美弦にとって、多忙な生活を支えてくれる人の存在は何より大きかった。

二歳年上の銀行員である恋人にプロポーズされたのは、三ヶ月前のクリスマススイブのこと。

『僕と結婚してくれませんか?』

夜景の見えるレストランで恋人の鈴木浩介から結婚を申し込まれた時、美弦は涙が出るほど嬉しかった。答えはもちろんイエス。付き合ってから四年になる恋人とはいつかそうなるだろうと思っていたからこそ、返事に迷いはなかった。

多忙ながらもやりがいのある仕事。

そんな自分を理解し、支えてくれる優しい婚約者。

美弦は確かに幸せだった。一ヶ月前、婚約者に突然別れを告げられるその時まで。

「月一でヘアサロンとネイルサロンに行ったくらいでどうして責められるの。ブランドもののバッグを買ったからってどうして引かれなきやいけないの。九センチのヒールを履いたら『見下されてる気分になる』って何よそれ、そんなの知らないわよ! 全部私が汗水垂らして稼いだお金でやっていることよ、それなのに文句を言われる筋合いなんじゃない!」

美弦は残りのビールを一気に飲み干すと、腹の底に溜め込んでいた鬱憤を一気にぶちまけた。

「マスター、ビールもういっぱいください!」

カウンター越しに空になったジョッキを突き出すと、受け取ったマスターはため息まじりに「美弦ちゃん」と窘めてきた。

「もうそろそろやめておきなつて。元々お酒はあんまり強くないんだから!」

「いーんです! こんなの飲まなきややつてられないわ!」

「はあ……じゃあもうこれで最後だよ。これを飲んだらまっすぐ家に帰ること。いい?」子供に言い聞かせる父親のようなマスターの言葉に美弦は素直に頷く。その様子にマ

スターは「本当に最後だよ」と再度念押しした上で、ビールジョッキをそっと目の前に置いてくれた。

駅から少し離れた高架線下にひっそりと佇むこの店は、カウンター席が六席あるだけの小さな居酒屋だ。

古びた外観はお世辞にも洒落しゃれしているとは言えないが、還暦かんれきを迎えたばかりのマスターが作る料理はどれも絶品で、知る人ぞ知る優良店である。

普段の美弦は、ほとんど外食をしない。毎日飲んでいたら酒代が馬鹿にならないから、飲酒するのももっぱら仕事の付き合いの時だけで、基本的には自炊を心がけている。

とはいえ美味おいしい食事もお酒も大好きな美弦の一番の楽しみが、月に一度の給料日に『善』に飲みに行くことだった。

美弦が初めて『善』を訪れたのは、新入社員になってしばらく経った頃。仕事に行き詰まって、ふと入ったのがこの店だった。

就職で上京した美弦は、密かにマスターを「第二の父」と呼ぶほど慕っている。そんなマスターの前で美弦はいつだって上機嫌だった。しかしこの店に通ってかれこれ六年、美弦は初めて荒れていた。

もう何杯飲んだかわからない。けれど二十八年間の人生で一番飲んでいるのは確かだ。おかげで頭はガンガンするし、心臓は全速力で走り終えた時のように激しく脈打って

いる。だがそうまでしても、美弦の心は一向に晴れなかった。

「でも、美弦ちゃんがうちの店に来てくれるようになってだいぶ経つけど、こんなに荒れているのは初めて見た。よっぽど彼のが好きだったんだね」

「……好きじゃなきゃ、四年も付き合わないわ」
「そりゃそうだ」

マスターはそう言っ肩をすくめると、口を閉ざして洗い物を始める。美弦に気を遣ってくれたのだろう。

話したい時は聞いてくれるし、静かに飲みたい時はそっと離れる。そんなマスターが営んでいるからこそ、美弦はこの居酒屋が大好きだった。

「こんばんは」
その時、店の扉がガラリと開いた。

「いらっしやいませ！」
「まだ開いてますか？」

一人しんみりと飲んでいた美弦は見もしないが、どうやら男性客のようだ。「はい！……あっ、ちょっとお待ちくださいね」

マスターが気遣うように美弦をちらりと見る。それは「他の客がいてもいいか」と尋ねているようで、美弦はすぐに「私は大丈夫だから」とマスターにだけ聞こえるように

小さい声で伝えた。

自分のせいで他のお客さんを断るなんて、そんなことさせてはいけない。ベロベロに酔っついていてもそれくらいの分別はある。

「お待たせしました。さ、好きな席にどうぞ！」

「ありがとうございます」

男性客が座ったのは、美弦の隣。

（わざわざそこに座る？）

客は美弦と男性の二人だけなのだから、せめて席を一つ空けてくれればいいのに。

そんなことを思いながら引き続き酒を飲む美弦の横で、男性は愛想良くオーダーをする。彼がまず頼んだのはビールと牛すじ煮込み。いずれも美弦が大好きなメニューで、ほんの少しだけ親近感が生まれる。

「この牛すじ煮込み、美味しいですね」

感心した様子の男性に「そうでしょう」と心の中で同意する。美弦が作ったわけでもないのに、自分の好きなものを褒められるとなんだかやけに嬉しい。

「他に何かおすすめのものをお勧めいただけますか？」

「はいよー！」

二人の何気ないやりとりを聞きながら美弦はそつと臉を伏せた。

（……浩介は、こんな風にマスターと話したりしなかったな）

付き合ひ始めてすぐの頃、美弦は浩介をこの店に連れて来たことがある。

自分の大好きな店を恋人に紹介したい。

そんなつもりで一緒に訪れたのだが、彼はこの店が肌に合わなかったらしい。「もう少し綺麗な店の方がいいな」と言われたのが、自分でも驚くくらいショックだった。

あの後も、美弦が『善』に通っていることを浩介は知らないだろう。

いいや、きっとそれ以外にも互いに知らないことはたくさんあった。

婚約者が自分以外の女性に心を奪われていたことに、美弦がまるで気づかなかったように。

（四年も一緒にいたのに）

一ヶ月前。美弦が久しぶりのデートに心を弾ませて待ち合わせ場所に行くと、見知らぬ女性が一緒にいた。そして突然別れを告げられたのだ。

青天の霹靂とはまさにあの時のことを言うのだろう。

少なくとも美弦にとっては寝耳に水だった。

『……本当にごめん、美弦』

こちらの顔を見もせず俯く浩介と、その隣で勝ち誇ったように微笑む女。その時の光景を思い出すたび、胸が引き裂かれそうに痛む。

あの瞬間、視界は真っ黒に塗り潰され、絶望的な気持ちになった。

それは一ヶ月経った今も変わらない。

泣きたくないのに目に涙が滲み、虚しくて切なくてたまらなくなる。

それが少しでも和らぐようにビールをぐくんと呷る。そんなことをしても胸の痛みが収まらなくて、込み上げてきた涙で視界が滲んだ、その時。

「大丈夫？」

不意に隣からかけられた声に視線を向けると、こちらを見ていた男性と視線が重なった。その顔立ちに美弦は思わず目を見張る。

濃い茶色の髪、扇形の眉に縁取られたアーモンド型の目。すっと通った鼻筋に形のいい唇。滅多にお目にかかれないような端正な顔立ちだったのだ。

（あれ、でもこの人……）

なんだか見覚えがある。けれど酔っ払ってぼうっとしてるせいか思い出せない。

いったいどこで見かけたのだろう——酔いでうまく回らない頭でほんやり考えていると、男性は心配そうにハンカチを差し出した。

甘いマスクについて見惚れていた美弦は、はっと我に返る。

「え……あっ！」

直後、手が滑った。ジョッキが転がり、こぼれた中身がカウンターに広がる。

「やだ、ごめんなさい！」

慌てておしほりでカウンターを拭き始める。幸い被害は美弦の手元だけで、男性の方までは広がっていない。とはいえ、来店早々目の前でビールをこぼされたらたまったものではないだろう。

「……すみません」

「俺にはかかってないから大丈夫」

男性は手にしていたハンカチをそっと美弦の膝に置く。

「それよりスカートを拭いた方がいい」

指摘されて気づいた。ビールがカウンターから滴り落ちて膝上に染みを作っている。

「あ、それなら自分のもので拭くので大丈夫——」

言いながらバッグに手を伸ばしたがハンカチが見当たらない。

そういえば退社前に化粧室に寄って、手を洗ってすぐに後輩の女性社員に声をかけられて……多分、その場に置いてきてしまった。

——最悪だ。

いい年をした大人が一人やけ酒をしてマスターに絡んだ挙句、お酒をこぼして他の客に迷惑をかけるなんて。酔いも手伝って泣きたい気分になってくる。

「……お借ります」

「どうぞ」

平謝りの美弦に男性は柔らかく笑む。

彼の醸し出す柔らかな雰囲気は少しだけ慰められながらスカートを拭くと、改めて感謝を伝えて新品で返したい旨を伝える。けれど男性は「そのままでもいいよ」と、さっと濡れたハンカチを美弦の手から抜き取った。

「それより、さっき俺を見た時に何か言いたげだったけど、気のせいかな？」

あなたがカッコよすぎて見惚れていたんです、とはさすがに言いにくい。

「あなたを見ていたのは……その、以前どこかで見たことがあるような気がして」

男性は驚いたように目を見張ったかと思うと、目を細めて唇の端を上げる。甘いマスクに突如浮かんだ色気に美弦はたまらず息を呑んだ。

「それは口説かれてると思っただけいいのかな？」

「え!？」

「嬉しいな。君みたいな美人にナンパされるなんて、男名前に尽きる」

「違っ、そんなつもりじゃ……本当にそう思ったから言っただけです!」

全くそんな意図のなかった美弦が真面目に言い返すと、すぐに「冗談だよ」と肩をすくめられた。

「もう……」

からかわれたことに少しだけ立腹する美弦に、男性は「でもよかった」と目尻を下げる。「綺麗な女性が一人で泣いているから心配していたんだ。でも今の姿を見て少しだけ安心した」

その時の笑顔があまりに優しくて、カッコよくて。何よりさらりと「綺麗」と褒めてくるスマートさに美弦が戸惑っていると、男性は重ねて優しい言葉を口にした。

「俺でなければ話を聞かよ」

「……聞いても何も面白くないと思いますよ。それに、名前も知らない相手に話すようなことじゃないです」

「恭平」

「え?」

「俺の名前。『うやうやしい』の恭に、『たいら』の平。君は」

「あ……一条美弦です。漢字は、『美しい弦』」

「綺麗な名前だな。君にぴったりだ」

「つ……ありがとうございます」

またもやさりと褒められて、恥ずかしいやら嬉しいやらでうまく答えられない。そんな美弦に恭平は「これで『名前を知らない相手』ではなくなったね」と柔らかく笑む。こちらを見つめる眼差しはとても優しく、美弦は思わず見惚れた。

「それに、他人だからこそ話せることもあると思うけど、どうかな」

——正直、誰かに聞いてほしい気持ちはある。だから美弦は、彼の言葉に甘えることにした。

婚約破棄から今日まで、怒りも悲しみも喪失感も……ありとあらゆる感情を自分一人で抱え込むのは、もう限界だったのだ。



『明日の金曜日の夜、時間を取れるかな？ レストランを予約したんだ。どうしても君に会いたい』

婚約者の鈴木浩介から連絡が来たのは、二月下旬のこと。

この時、美弦は十日間の長期出張を終えて東京に戻る新幹線の中にいた。

(浩介には会いたいけど、どうしよう)

明日のスケジュールはこれでもかというほどぎっしり詰まっている。

出張の報告書も仕上げなければならぬし、会社を空けていた期間に溜まった事務仕事もしたい。優雅にデイナーを楽しんでいる余裕などないのが実情だ。

フランチャイズ部門の営業職として東京を拠点に日々全国を飛び回っている美弦は、

月の三分の一は地方で過ごしていると言っても過言ではなく、自宅には寝に帰るような生活を送っていた。

主な仕事は、地方ホテルのオーナーに御影ホテルへのフランチャイズ加盟を提案、契約することだ。

御影ホテルはビジネスホテルの運営を主としており、その数は国内で八百、北米に五十と国内外に幅広く展開している。それ以外にもマンションやリゾートの都市開発や不動産など、事業内容は多岐にわたり、親会社である御影ホールディングスを筆頭に、国内外に数十の関連会社を持つ大企業である。

国内には個人経営のホテルが数多存在するが、経営に苦しむオーナーは少なくない。その原因は、立地を活かしていなかったり、集客方法に悩んでいたりと……とホテルによって様々だ。美弦はそうしたホテルのオーナーに、「御影ホテルとフランチャイズ契約することで、それらを改善しませんか」と提案している。

契約することで御影ホテルは自社の名前やブランド力、運営マニュアルをオーナーに提供する。対してオーナーはそれらを利用して集客アップを目指し、決まったロイヤリティを御影ホテルに支払うのだ。

そして美弦の仕事は「契約して終わり」ではなく、契約したホテルの開業に一から立ち合うこともある。

営業部に配属されるまでの二年間は、ホテルで接客業にあたっていた。

その時の経験や御影ホテルで学んだ運営のノウハウをもとに、フランチャイズ先のホテルの事業がうまくいくようサポートしている。

難しい仕事ではあるが、頑張った結果がそのまま給与に反映されるので、やりがいはあった。

なぜなら、自分には稼がなければならぬ理由がある。弟の亮太の学費のためだ。

美弦に父親はいない。小学生の頃、他に女を作って出て行ったのだ。

その結果、両親は離婚し、看護師の母が美弦と十歳年下の亮太を女手一つで育ててくれた。

亮太は現在高校三年生で、これから進学などでお金がかかってくる年齢である。

母もまだまだ現役で働いているけれど、若い頃に苦労した分、これからは自分の生活を大切にしてほしい。それもあり、美弦は給料の大半を実家に仕送りしていた。

自炊で節約しているのもそのためだ。全ては女手一つで美弦を大学まで行かせてくれた母への感謝の気持ちと弟の学費のため。

仕送り分以外の給与は家賃や生活費、美容代、そして月に一度の飲み代でほぼ消える。おかげで貯蓄に回す余裕はほとんどないものの、お金は弟の卒業後に貯め始めればいい。そんな切り詰めた生活の中でも、美容にお金を使うのは仕事のためでもある。

辛くて泣きそうになった時、鏡に映った自分の姿が美しいと「もう少し頑張ろう」と思える。ふとした瞬間に整ったネイルが視界に入ると気分が上がる。

前向きな気持ちになればもっと頑張ろうと思えるし、巡り巡って結局は自分のためになる。

美弦は家族や自分のために仕事を頑張り、綺麗でいようとする自分が好きだ。

しかし、世の中にはそんな美弦を面白く思わない人がいるらしい。

背中まで伸ばした黒髪をふんわりと巻いて、下品にならない程度に体の線が綺麗になる服を着る。ヒールは最低でも七センチ以上。

それが本社に出勤する時の美弦の基本スタイルだ。

けれど、社内の人間——特に女性社員の目には「お高く止まっている」と見えるようで、陰口を叩かれることも少なくない。百六十七センチの身長や、どちらかというときつい顔立ちが余計にそう見せているのかもしれない。

でも美弦は構わなかった。好かれるに越したことはないけれど、会社にはお友達を作りに行っているわけではない。美弦を信頼して仕事を任せてくれる上司もいるし、親しい同僚もいる。

何より浩介の存在が大きかった。

最近は美弦が多忙だったこともあり、この半年は月に一度会えればいいくらい。

それでも浩介は怒るところか文句一つ言わず、「仕事を頑張る美弦が好きなんだ」と、応援して、プロポーズまでしてくれた。

——そんな浩介が「会いたい」と言っている。

もしかしたら口に出さなかっただけで、寂しい思いをしていたのかもしれない。

(もう一ヶ月以上会っていないし、そろそろ両家の顔合わせの相談もしないと。浩介の話もそのことかな?)

恋人から婚約者になって嬉しかったことは大きく二つある。

一つは、将来を共にする存在ができたこと。

もう一つは、母に結婚の報告ができたことだ。

母は、父と離婚したことを後ろめたく思っている節がある。

美弦はそんなこと全く思っていないし、不倫する父親なんて必要ないと本気で思っているけれど、母はそうではなかったらしい。

だからこそ美弦が「結婚を考えている人がいる」と話した時、母はとても喜んでくれた。

『お母さんは結婚に失敗しちゃったけど、美弦は幸せになってね』

そう言って電話口で泣きながら祝福してくれた。

そんな母に、少しだけ親孝行ができた気がして嬉しかったのだ。

(それも浩介のおかげよね)

悩んだ末、美弦は婚約者の誘いを受け入れた。休日出勤になるのは間違いないけれど、それでも浩介に会いたい気持ちの方が大きかったから。

しかし、当日待ち合わせしたレストランに行くと、浩介の隣には見知らぬ女がいた。年齢は多分二十歳くらい。焦茶色の髪をふんわりと巻いた素朴な顔立ちの女の子だ。まだあどけなさの残るその顔は、どう見ても美弦よりずっと年下だ。

(大学生？ それとも浩介の後輩とか……?)

初めはそう思ったが、近くで見るとその可能性は消えた。

彼女の身につけているものがハイブランド品だったのだ。

後輩というより、むしろ取引先の社長令嬢と言われた方がよほどしっくりくる。

いずれにせよ、久しぶりのデートに見知らぬ他人を同席させるなんて……しかも隣に座らせるなんて感心しない。

「浩介」

美弦は戸惑いながら恋人のもとに向かい、対面の席に腰を下ろした。

「はじめまして、一条美弦さん。私は園田桜子そのださくらこと言います」

真っ先に口を開いたのは桜子と名乗った見知らぬ女。いきなりそうくるとは思わず面食らう美弦に、彼女は続けて言い放つ。

「突然のことで驚かれるとは思いますが、浩介さんと別れてくださいますか？ 彼は

今、私とお付き合っているんです」

「……どうということ？」

突然すぎる申し出に啞然とする美弦に、桜子にはこりと笑う。

「そのままの意味です。何も難しいことは言ってませんが、もしかして日本語が不自由とか？ そうとは知らずに失礼しました」

完全にこちらを小馬鹿にした言い方に、美弦は無言で眉を寄せる。

(勘弁してよ)

頭が痛い。話を聞かなくとも面倒なことになりそうな予感がひしひしとする。美弦は対面で俯うつむいている恋人に視線を向けた。

「……浩介。どうということなのか説明してくれる？」

「ですから、今私がお話したように——」

「桜子さんと言ったわね。私は今、浩介と話しているの。あなたには聞いていないわ」

桜子が口を挟もうとするのをびしやりと遮さへぎる。

冷たく厳しい物言いに桜子は反論しようとして口を開きかけたが、美弦はそれを視線で黙らせた。幼い頃から『目力が強い』と言われる美弦の眼力に、桜子は怯おそえたように肩をすくませると「怖い」と浩介の肩に身を寄せる。

「っ……………！」

——浩介から離れて。

言いかけた言葉を呑み込んだのは、今ここで明らかに年下の桜子相手に怒鳴ったら、周囲の目に自分がどう映るか予想がついたから。

事実はどうあれ、長身の美弦と小柄こびよで華奢きゃしゃな桜子とでは、どうしたって美弦が弱い者いじめをしているように見えるに違いない。

(浩介もどうして振り払わないの)

鼓動が一気に速くなって胸が痛い。けれどそんな内心に気づかれないよう、美弦は深呼吸して無理矢理気持ちを落ち着かせると、今一度恋人に問いかけた。

「浩介。黙っていたらわからないわ」

先ほどより語気を強めて呼ぶと、浩介は俯うつむいたままか細い声で答えた。

「ごめん、美弦。僕と桜子さんは先月から付き合ってる。……結婚を前提に」

「は……………」

(結婚?)

——意味がわからなかった。

頭から冷水をかけられたような感覚に陥おとる。怒りよりも悲しみよりも、浩介の言ったことが理解できず、混乱して思考が止まる。

「……何を言ってるの。だって、私たち婚約してるのよ。クリスマスイブにプロポーズ

してくれたわよね？ お互いの親と顔合わせをしようって話もしたじゃない」

「それは……ごめん。なかったことにしてほしい」

「突然そんなこと言われて『はいそうですか』なんて言えるわけないでしょ!?! どういうことなのかちゃんと説明して!」

「ですから、浩介さんがお話しした通りです！ 私たち、結婚するんです。もうお互いの両親には紹介済みですし、式場のリストアップも始めています。ちなみに私の父は、浩介さんの勤め先であるA銀行の頭取です。私とあなた、どちらと結婚すれば彼の未来が明るいのか、言わなくてもわかりますよね」

先ほど黙らされたのが悔しかったのか、またも桜子が口を挟む。けれど今度は、美弦はそれを止めなかった。衝撃が強すぎたのだ。

美弦が黙ったのを好機と捉えたのか、桜子は自分と浩介の出会いを饒舌に語り始めた。二人が出会ったのは、年が明けてすぐ。つまり、浩介が美弦にプロポーズして間もない頃だ。

当時大学四年生の桜子は、初めて参加した合コンで浩介と出会い、その人柄に惹かれた。初めは「恋人がいるから」と振られたけれど、どうしても浩介のことを諦めきれずに想いを伝え続けた結果、結ばれた――

「初めは浩介さんとの結婚を反対していた父も、『浩介さん以外の男の人とは一生結婚

するつもりはない』と言ったら認めてくれました。それくらい、私は彼のことを愛しているんです」

自分がいかに浩介を想っているのか、聞いてもいないのに桜子は揚々と語る。

それを聞けば聞くほど、美弦の心は冷えていった。

(合コンって、何よ)

自分という婚約者がいながら、なぜそんな場に行くのか。

突っ込みどころがあまりに多すぎて言葉が出ない。

「浩介さんは、あなたと一緒にいると息が詰まるんですって。『美弦といると劣等感を感じてしまう』と話していました。初めは意味がわからなかったけど、今日あなたに会ってその意味がわかりました。一条美弦さん。あなた、完璧すぎるんです」

「……完璧？」

だってそうでしょ、と桜子は吐き捨てる。

「美人で、モデルみたいにスタイルがよくて、髪もサラサラ、ネイルもバッチリ。勤め先は一流企業の御影ホテルなんて、絵に描いたようなキャリアアウーマンだわ。収入だって同世代の男性よりも多いですよ。ここまで揃うと一緒にいる男の人はどうしたって自分と比較します。あなたという存在がいるだけで浩介さんを苦しめているんです。実際、あなたたち、もうずっとセックスしていないじゃないですか」

「——っ！」

「でも、私は違う。……意味は、言わなくてもわかりますよね？」

（聞きたくない）

もう黙って、静かにして。

——今すぐ耳を塞いで、この場から逃げ出したい。

浩介とセックスストレス状態が続いていたのは、事実だった。

だがどうしてそれを赤の他人に指摘されなければならぬのか。

無神経な桜子と、そんなことを第三者に話した浩介への怒りで指先が震える。

「浩介」

美弦は声を荒らげそうになる自分をなんとか抑えようと、俯いたままの恋人を今一度見据えた。

「今の話は本当なの？」

「ごめん」

「謝罪じゃなくて説明をして。今日私に話したかったことって、別れ話？」

「……本当にごめん、美弦」

そう言ったさきり、また彼は黙り込んだ。その姿に美弦の怒りは極限に達した。

「——いい加減、顔を上げたらどうなの」

自分でも信じられないくらい冷たい声だった。それに驚いたのか、浩介は弾かれたように顔を上げる。今日初めて正面から見たその顔はひどく青ざめていて、どちらが被害者だかわからない。

（どうしてあなたがそんな顔をするの）

彼がこちらを見たのは一瞬で、すぐにまた下を向く。それがいつそう美弦を苛立たせた。「自分よりずっと年下の女の子に全て言わせて、自分は黙り込んでるなんて情けない。三十歳の男の行動にはとても思えないわ」

冷やかに言い捨てる。これに浩介は悲しそうな顔をするが、やはり何も言い返さない。その姿に改めて心の底から情けなく思った。

『美弦以外に好きな人ができた。だから別れよう』

本人の口からはっきり言われたのなら、怒ることも悲しむこともできる。でもこんな風に浮気相手に——しかも自分よりずっと年下の、愛されている自信に満ち溢れた女に言われては、皮肉を返すくらいしかできない。

本当にこれで全てを終わらせるつもりなのか。自分は殻に閉じこもって、他人に全てを語らせて。

浩介にとつて、美弦と過ごした四年間はそんなにも簡単なものだったのか。

（せめて私の顔を見なさいよっ……！）

たまらず拳を強く握って浩介を睨む。けれどこれに反応したのは桜子だった。「ですから！ あなたのそういう性格が浩介さんを追い詰めたんじゃないんですか!?」彼女は自分が責められたとばかりに眉を吊り上げ、怒りを露わにする。こちらを責める姿はまるで毛を逆立てた猫のようだ。

他人の性事情をあげすけに話したり、非難したり、かと思えば怒鳴り散らすなんて、どこまで非常識な子だろう。

こんなに失礼な人間には会ったことがない。けれど、桜子の純粹なほどまっすぐな怒りに美弦は悟った。

——この子は、本当に浩介のことが好きなんだ。

大手銀行の頭取の娘。ならば桜子は真正正銘のお嬢様だ。ハイブランドばかり身につけているのも納得がいく。一会社員である浩介との立場の差はあるが、それを父親に認めさせるほど浩介を愛していると言い切った桜子。

(じゃあ、私は?)

恋人を奪われた屈辱や怒りはある。けれど今ここで、「浩介の恋人は私だ」「彼は渡さない」なんて言い返すほどの強い気持ちは……既に美弦にはなかった。

ここにきてもおなほ、俯いて黙ったままの浩介の姿を見ればなおさらだ。

(……なんだ。もうとつくに私たちは終わっていたんだ)

そうわかってても、やはり四年付き合った恋人に裏切られたのは……辛くて悲しい。本当は大声を上げて泣きたい。私の四年間を返してと浩介を責めて、詰りたい。

でもそんなことはしない。少なくとも桜子の前でそんな惨めな姿なんて絶対に見せたくない。

「——もういいわ」

だから、美弦は笑った。

「最後まで女性の陰に隠れて何も言えないような意気地のない男、私の方から願い下げよ。お望み通り婚約破棄してあげる。慰謝料はいらさないわ。そのかわり金輪際、私に連絡してこないで」

『美弦の笑った顔、好きだな。自信に満ちていてすごく綺麗だ』

かつて浩介がそう褒めてくれた時と同じように、口角を上げる。そして自分が最も美しく見える笑みを湛えて二人を正面から見据えた。

「腑抜け男と略奪女。あなたたち、とつてもお似合いよ」

どうぞお幸せに。

そう言って立ち上がり背を向けた時だった。

「美弦……!」

背中に届いたのは、まるで引き止めるみたいな浩介の声。

耳に馴染んだ元恋人の声に胸を掴まれるような気がしたけれど、美弦は振り返らなかった。今はただ、一秒でも早く二人の前から立ち去りたい。

——絶対に、涙なんか見せたくなかったから。



「それから今日まではもう散々。私を面白く思っていない子たちには、あることないこと陰口を言われたり、男性社員にもやけにじろじろ見られるし」

「婚約破棄直後で凹んでいる時、営業事務の女の子に「どうしたんですか？」と聞かれ、つい婚約破棄されたことを話してしまった。それがいけなかった。」

次の日には社内中に噂が駆け巡り、一ヶ月経った今では話したこともない社員から同情や好奇の視線を向けられる始末だ。しかも、噂の種類は多岐にわたる。

怒った美弦が婚約者をボコボコに殴ったというものがあれば、「別れたくない」と泣いてすがったというものもある。『婚約破棄された惨めなアラサー女』と悪意を持って陰口を叩く人がいるのも耳に入ってきている。

「針の筵しじょうって、こういうことを言うのね」

「それはどうだろう。針の筵しじょうって言うより、期待の表れじゃないか？ 男連中はきつと、

フリーになった君を狙っているはずだ。いつも以上に見られている気がするの、そのせいだと思うけど」

「……そんなことないわ。私を好きになつてくれる人なんて、いるはずない」

今の美弦はかつてなく自信を喪失している。

自分と真逆のタイプの、ずっと年下の女の子に婚約者を奪われて、自信なんか持てるはずがない。けれど返ってきたのは、またも意外な言葉だった。

「君は十分すぎるくらい魅力的だ」

ストレートな褒め言葉、そして真摯しんしにこちらを見据える瞳に心を貫かれる。

「つ……あ、ありがとう」

不覚にも胸が高鳴った。酔いとは違う意味で鼓動が速まる。

「魅力的」と言った時の声の響きがとても真剣だったからだ。

今の今まで元婚約者を想って凹くぼんでいたのに、別の男性相手にときめくなんて。けれどこれは不可抗力だと思う。目の前の男ほどの美丈夫びじゆうぶかつ美声の持ち主からこんな風に自身を肯定され、褒められて、心が揺れないはずがないのだ。

でもこれは、浩介に対して抱いていた感情とは全くの別物だ。憧れていた芸能人に遭遇してドキドキしているのと変わらない。

——もしかしたら自分は、死ぬまで独身かもしれない。

本気でそんなことを考える。

「……私のことを好きじゃなくてもいいから、誰か結婚してくれないかしら」
自虐まじりにそうこぼす。

「相手を問わないくらい結婚に憧れているのか？」
「そういうわけじゃないけど……ただ、母を悲しませたくないの」

母の離婚理由は夫の不倫。それに傷つき、「娘には幸せになってほしい」と願う彼女に「自分も同じ理由で婚約破棄になった」なんて口が裂けても言えない。

正直に話したら母は美弦を慰め、励ましてくれるだろう。

しかし、態度には出さなくとも、ガツカリさせてしまうのは間違いない。

不幸中の幸いは、「結婚を考えている人がいる」と伝えただけであること。名前を伝えたり、実際に会わせていたりしたら、母の落胆は増していただろうから。

「ちなみに、今の君が結婚相手に求める条件は？」

「……私を裏切らないこと」

意外だったのか恭平が目を見開く。その気持ちはわかるけれど、これが本音だ。

二股された拳句に振られるなんて経験は、もう二度としたくない。

「仕事やプライベートに干渉されるのも困るわ」

これではただの同居人だ。しかし浩介は違った。彼となら一緒に歩んでいけると思っ

たのに。

「……何がいけなかったのかな」

そう小さくこぼした美弦は残ったビールを飲む。

「節約していること？ 仕事に熱中しすぎたこと？ それとも派手に着飾ったり、美容

にお金をかけていること？」

仕方ないじゃない、と美弦は囁くように口にする。

「全部含めて、私なんだから」

恭平に話し始める前は「私は悪くない！」と息巻いていた。けれど、改めて振られた

事実を言葉にすると、惨め^{みじ}でたまらなくなる。

（……話すんじゃない）

恭平の優しさについて甘えてしまったけれど、酔っ払い女の失恋話なんて面白いはずがない。

（きつとこの人も呆れてるに決まってる）

そう思うと彼の反応が怖くて顔を上げられない。

仕事モードで気を張っている時は我慢できる。でも心が緩んでいる今、同情や好奇の目で見られたら、今度こそ泣いてしまう気がした。

「頑張ったな」

そんな美弦に返ってきたのは、薄っぺらい慰めや励ましではない、自分を肯定する言葉。驚いた美弦は弾かれたように恭平を見て、驚いた。

穏やかな茶色の瞳にあるのは同情ではなく、見守るような優しさだったのだ。

「頑張ったって……私が？」

違う。そんなことない。

だって自分は、勝ち誇る桜子に対して虚勢を張ることしかできなかった惨めな負け犬だ。けれど恭平は、そんな美弦の考えを根本から吹き飛ばす。

「一生懸命働いて、実家に仕送りをして、綺麗でいようと努力する。君はこれ以上ないほど頑張ってるよ。それに儉約家なんて素敵じゃないか。無駄遣いするよりずっといい。使うべきところに使って締めるところは締める。お金の使い方が上手な証拠だ」

桜子が欠点と指摘したことを、恭平は全て美点だと言ってくれた。

まさかこんな言葉をかけてもらえるとは思わず、不意に涙が溢れる。

「つ……やだ、ごめんさい」

酔って絡んだ挙句に泣くなんて、迷惑この上ない。すぐに泣きやまなければと思うのに、高ぶった感情はそう簡単に治まらなかった。

——だって、嬉しかったのだ。

「頑張った」なんて言ってくれたのは、恭平だけだったから。

婚約破棄以降、美弦はずっと気を張り詰めていた。

浩介のことを思い出さないよう仕事に打ち込んだ。けれど完全に忘れるなんてもちろん無理で、ミスをしたり、あることないこと噂されたりした。

そんな心身共に限界だった美弦にとって、恭平の言葉はまるで乾いた砂漠に不意に降った慈雨のように優しく染み渡る。

「我慢しなくていい。自分の気持ちを無理に抑え込まなくていいんだ。恋人に裏切られて何も思わない人間なんていない。悔しい、辛い、悲しい……そう思うのは当然の感情だ」

「あ……」

目尻から溢れる涙を恭平の指が優しく拭う。

「だから今は思う存分泣いて、怒ればいい。美味いものをたくさん食べて、たくさん眠って。そうすればいつか彼のことを忘れられる日がきつとくる。その時の君は、今以上に素敵な女性になっているはずだ」

そう言って微笑む彼はとろけるように優しい顔をしていて、不意に美弦は思った。

「……あなたみたいな人と結婚する女性は、きつと幸せね」

出会ったばかりの、下の名前しか知らない他人。それでもわかる。

恭平は優しい人だ。見目麗しくて、誠実で、優しい。

彼のような男性はどんな女性を愛するのだろうか。

素直で、可愛くて、可憐な子だろうか。少なくとも、酒の力を借りないと涙も流せない意地っ張りな自分のような女性ではないはずだ。

「じゃあ、俺とする？」

「するって、何を？」

目を見張る美弦の耳元に恭平が顔を寄せる。

「——結婚」

背筋が震えるほどの色気を纏った声で、恭平は囁いた。

熱い吐息が耳にかかり、美弦は反射的に立ち上がる。だが酔った体がついていけず、脚がもつれて視界がぐらりと揺らぐ。けれど倒れる前に、さっと恭平の腕が腰に回り、美弦を椅子に座らせてくれた。

「あのっ……!!」

大きな手のひらが腰に添えられている。その感触をやけに熱く感じて、甘い痺れが背中を駆け抜けた。

恭平の雰囲気はまるで別人のようだった。

先ほどまでの穏やかな眼差しが妖しく獐猛なものに変わり、表情は変わらず優しいのに瞳の奥が笑っていない。まるで獲物を前にした肉食獣のような雰囲気動けなくなる。

「一条美弦さん。俺と結婚しませんか？」

チョコレート色の瞳がゆっくりと近づいてきて——美弦の記憶は、そこで途切れた。

都内の夜景が一望できるマンションの一室。室内を照らしているのは窓からぼんやりと差し込む月明かりだけ。

そんな中、キングサイズのベッドの上に二つの人影が浮かび上がる。

周囲には脱ぎ捨てられた衣類が散らばっていた。静かな室内に溶けるのは、唾液を絡め合う音と荒々しい吐息、そしてシーツがずれる音だけだ。

裸で仰向けになる美弦に覆い被さっているのは、同じく素肌を晒した恭平。

彼は左手で美弦の両手を頭の上で一つにすると、右手で彼女の頬を優しく撫でる。けれど優しい手つきに反してキスは荒々しい。

「んっ……ふあ……」

「もっと口を開けて。君の可愛い口の中を感じたい」

熱い舌が強引に美弦の唇を割って侵入する。反射的に引つ込めた舌はすぐに絡め取られ、強く吸われた。そのまま歯列をなぞり、内壁を舐められる。息をする間もない激しい口付けに、美弦はされるがままで。くちゅくちゅと唾液の絡まる音がなんともいやらしい。

——知り合ったばかりの男と体を重ねている。

この四年間、浩介一筋だった美弦は、自分の身に起きている初めての経験に心も体もついていけない。酔ってうまく回らない頭で「どうしてこうなった」と息を乱しながら考えるが、思考はまとまらなかつた。

恭平のマンションに到着して玄関のドアが閉まるなり、二人は貪るようなキスをした。激しい口付けの後、恭平は美弦を横抱きにして寝室に向かう。そこで彼女の衣服を一気にはぎ取ると、自らもまた裸になったのだ。

「今、何を考えてた？」

嵐のような口付けの合間に、恭平は背中がぞくりとするほど色香の滲んだ声で問う。

「考え事をするなんて随分と余裕だな」

「違っ……！」

「キスだけじゃ君を夢中にさせられないなら——もっと、俺を感じてもらわないと」

言うなり恭平は美弦の耳殻をなぞるように舐める。

先ほどまで口の中を蹂躪していた舌を耳に這わせて、食んで、息を吹きかけて。

そのたびに美弦は、意識が飛びそうな快感に襲われて、本能的に腰を揺らす。

「美弦」

低くて心地よい声に名前を呼ばれる。

「俺を見て。俺を感じて——俺に夢中になって」

今は体だけでいいから、と見惚れるほどどうとどした顔で恭平は微笑む。

「すぐに婚約者を忘れるとは言わない。でも今こうして君に触れているのは、俺だよ」だから。

「今は、俺以外のことなんて考えるな」

物腰の穏やかな紳士が、美弦を求める雄になる。

「待って……あつ！」

呼びかけた言葉は甘い嬌声に変わった。恭平に乳首をピンと弾かれたのだ。

「それ、だめえ……！」

「『いい』の間違いだろ？ だって——ほら。君のこころはこんなに赤く色づいている」

言いながら彼はぶつくりと膨らむ先端をいじり始めた。

甘い痛みにも美弦は思わず身をよじって腰をくねらせる。その反応に気を良くしたのか、恭平は顔を胸に近づけて、ぱくんと口に含んだ。

その瞬間、美弦の体は大きく跳ねた。けれど恭平は止まらない。

屹立した乳首を舌でこねくり回し、ちゅつと吸ってやんわりと食む。その間も彼の両手は美弦を攻め続けた。

豊満なバストを下から掬い上げ、緩急をつけて揉みしだく。彼の思うままに形を変え、双丘の先端を指先でつまんで、弾いて、押し潰す。

「おかしくなっちゃっ……！」
その直後、目の前が真っ白になって、頭の中で何かが弾ける。
口と手で攻められ続けた美弦は達した。そんな美弦を恭平は甘い瞳で見下ろす。
「……本当に眩暈がするほど綺麗だな」

細い首に形のいいデコルテ。仰向けになってもなお形の崩れない豊満なバストに、きゅっとくびれた腰から続くふっくらとした尻。引き締まった両脚。華奢ながら女性らしいまるやかさのある体を、熱を帯びた視線が舐め回す。

ただ見られているだけなのに、子宮の奥がずくんと疼く。

中に触れられたわけでもないのに体の芯は切ないくらいに熱を持ち、その証に内側から溢れたとろりとしたものが太ももの付け根を濡らした。

（やだ、なんで……！）

反射的に太ももを擦り合わせる。するとくちゅ、と粘着音が静かな室内に溶けた。これに恭平が気づかないはずがなかった。

「見られただけで感じた？」

凶星を指された美弦は羞恥心でいたたまれなくなる。

美弦は知らなかった。

恥ずかしそうに頬をピンク色に染めて、脚を擦り合わせる姿がどれほど男の劣情を誘

立ち読みサンプル はここまで

うのか。

事実、艶かしく横たわる美弦の姿に、恭平の喉仏がぐくんと上下した。

「最高にエロいな。可愛くて、色っぽくて、たまらない」

——エロいなんて。

「……初めて言われたわ」

息を乱しながら呟くと、恭平はありえないとばかりに大きく目を見開いた。その表情から驚きようが伝わってくるけれど、残念ながら本当のことだ。

派手な外見から「男関係が激しそう」と誤解されがちな美弦だが、実際は違う。過去に恋人と呼べる相手は浩介だけだった。

告白されたことはあるけれど、中学生の頃は弟の世話をするのが一番だったし、高校と大学は「少しでも母を経済的に助きたい」「せめて学費くらいは自分で出したい」と勉強とバイトに忙しく、恋をする暇なんてなかった。

就職してからもそれは同じで、初めの二年間は仕事に慣れるのに必死だった。ようやく仕事に楽しみを見出した頃にできた初めての恋人が、浩介なのだ。

手を繋ぐのも、キスは、セックスも、セックスも、美弦の初めては全て浩介に捧げた。

そんな彼とのセックスは……よく言えば丁寧、悪く言えば機械的だった。

軽く触れ合うようなキスをして、互いに触れ合って、挿入して、あちらが果てたら終